

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア通信 ⑩

ダンテの『神曲』とイスラーム

深草 真由子

世界を知りたいという強い気持ちを抑えきれず、オデュッセウスは「深く広い海へ乗り出した(ma misi me per l'alto mare aperto)」。地中海を西へ西へと船を進めて「ここから先に人間は行かないように(acciò che l'uom più oltre non si metta)」ヘラクレスの柱が立つジブラルタル海峡に到着した。この西方の地果てる場所から、まださらにその先へと進むため、オデュッセウスは船員仲間を鼓舞して言う。沈む太陽の向こう側まで、人の住まぬ世界まで行こうじゃないか。「君たちの起源を考えてみよ。君たちは獣のごとく生きるためではなく、徳と知を追求するために造られたのだ(Considerate la vostra semenza: / fatti non foste a viver come bruti, / ma per seguir virtute e canoscenza.)」。海峡を越えて南西へと舵を切った一行は、煉獄山を遠くに眺めて喜んだのもつかの間、突風のために船は傾き、オデュッセウスらは海に飲み込まれた。これが神の意志であった。

未知へと大胆に踏み込んでいく無限の好奇心と、神の導きなしに自分の力だけで究極の真理に到達できると考える人間の驕り。『神曲』の地獄篇第26歌でダンテはオデュッセウスの最期をこのように歌った。オデュッセウスについては、『オデュッセイア』のように故郷イタケーへ戻る伝説のほか、大西洋を航海してリスボンを建設し、そこからアフリカ西岸を進む途中で嵐にあって死んだという伝説も存在する。ダンテは西方への冒険を企てるオデュッセウスのほうを『神曲』で採用したのだ。一方、ヘラクレスの柱を越えてはならないという海

峡通過禁止の掟は、ダンテの創作上の工夫だったのだろうか。著名なダンテ学者マリア・コルティによれば、こうした掟は古代ギリシアやローマの時代にはなく、人々は躊躇することなくジブラルタル海峡を行ったり来たりしていた。しかしそのずっと後の時代に、交易を独占するためにアラブ人が定めた通行禁止命令が存在するという。アラブ人の歴史家、地誌学者らの残した記録には、みごとな髭をたくわえた男の大きな像がジブラルタル海峡にあり、海に向かって左腕を上げ「進むな」という合図をしていたとある。なんらかの形でこうした情報がダンテの耳にも入っていたのだろうか。



【ダンテ・アリギエーリ】

ダンテの生きた十三世紀は、ヨーロッパ・ラテン文明が異なる文明と出会い、それを受容しながら発展していく、そんな時代であった。交易や聖地巡礼のために人々は旅をした。中国まで行ったマルコ・ポーロも十三世紀の人である。十字軍は東方に遠征して戦をしたが、イスラームやビザンツの文化を、さらにペルシャやインドについての情報をヨーロッパにもたらした。シチリア王フェデリーコ二世はギリシャ語やアラビア語が得意で、学芸を重んじ、宮廷にはシチリア派詩人だけではなくユダヤやイスラームの知識人をも抱えていた。一方、八世紀からイスラーム世界の一部であるアンダルシアは、モロッコに成立したムワッヒド朝の勢力下にあり、イスラーム教徒と共生する土地となっていた。カスティーリヤのトレドではキリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラーム教徒の学者が、ギリシャ語やアラビア語の文献をカスティーリヤ語に翻訳していた。パリではトマス・アキナスが、アラブの哲学者らによって伝えられたアリストテレスを研究し、キリスト教神学との融合をはかった。

1919年スペインのアラブ文化学者ミゲル・アシン・パラシオスは『神曲にみられるイスラーム終末論』という論文の中で、イスラーム文学に描かれた黄泉の国と『神曲』のそれとの間にある共通点を指摘し、両者の関連性を明らかにしようとした。しかし時代が時代。ヨーロッパ中世キリスト教文化のシンボル『神曲』が、われらの偉大な詩聖ダンテが、植民地の伝統となんらの関係があるのか、あるはずがない。そんなふうには、とりわけイタリアの研究者は冷淡な反応を示したそうである。

イスラームの彼岸の世界を伝える文学作品の中で『神曲』ともっとも近く、ダンテが実際に読んだか、あるいは「読んだ」とまでは言えなくても「知っていた」可能性があると考えられているのは、『階段の書』と題される作品である。八世紀にアラビア語で書かれたこの物語は、1264年アルフォンソ十世治世下のトレド翻訳学校においてカスティーリヤ語に訳され、さらにラテン語と古フランス語に重訳された。ファツィオ・デッリ・ウベルティの『ディッタモンド』(1350～60年)にも『階段の書』への言及があることから、当時のイタリアでもある程度知られていた作品であることが分かる。

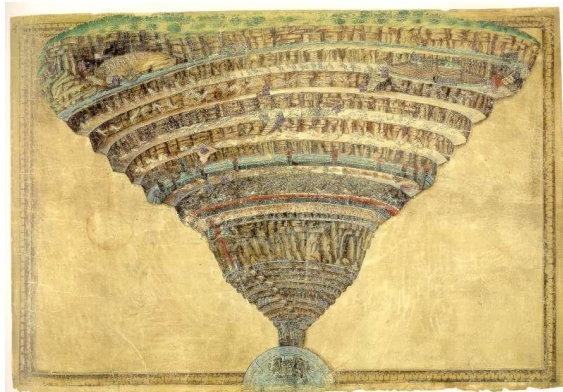


【カスティーリヤ賢王アルフォンソ十世】

『階段の書』では、大天使ガブリエルに導かれた預言者ムハンマドが、光る階段を上って天国へ至り、八つの天を見たあと神にコーランを託され、それから地獄へ下って七つの大地をめぐる。旅人が一人称で語る設定と案内役の存在は『神曲』と同じである。『階段の書』はどちらかというと民話調で、扱うテーマや表現の多様さが魅力的な作品である。マリア・コルティはとりわけ地獄の旅において『神曲』との類似点が目立つとし、いくつかの例を挙げている。たとえば、『階段の書』における地獄の底には悪魔の住処と呼ばれる要塞都市があり、その城壁、塔、家々は燃えつづけるどす黒い炎で包まれているが、そのありさまは『神曲』のディーテの都市を連想させる。ディーテでは異端者たちの埋葬されている墓が燃えあがっており、その炎は都市全体を赤く彩っている。旅人ダンテはディーテに近づいた時、あたかも炎の中から出てきたように鮮やかに赤く燃える塔を指してmeschiteという単語を使っている(第8歌70行目)。スペイン語のmesquitaをイタリア語風に複数にした形だが、これはモスクのことだ。当時イスラーム教はキリスト教の異端と見なされており、そのため預言者ムハンマドは人々を真の信仰から遠ざけた背教者であり、キリスト教を二つに分断した張本人だと考えられ

ていた。詩人ダンテもムハンマドを地獄に落とし、あごから肛門まで切り裂かれ、腸をあらわにした姿でこう言わせている。「お前がここで見る者はみな、生きている時に不和と教会分裂の“種をまいた者”であり、それゆえこのように身体を裂かれているのだ(E tutti li altri che tu vedi qui, / seminador di scandalo e di scisma / fuor vivi, e però son fessi così.)」(第28歌34～36行目)。つまりここで罪人ムハンマドは旅人ダンテに応報の法則を説明しているのだ。一方『階段の書』においても、人々の間に不和を引き起こすために言葉の“種をまく者たち”(qui verba seminant ut mittant discordiam inter gentes)が、火箸で舌を引き抜かれる場面がある。そのようすを見た旅人ムハンマドは言うのである。「すべての罪人は、犯した罪に応じて罰を受けているのだ」と。

『階段の書』が『神曲』の出典であったのかどうかは、言うまでもなく、以上のような類似点を拾いあげるだけでは十分ではなく、解明のためには他にヒントが出てくるのを待つしかないだろう。ともあれ、二つの異なる文化の衝突と融合の可能性がここに見出されるなら、現代を生きる私たちになにかしらの示唆を与えてくれているようにも思われて興味深い。



【ボッティチェリによる地獄の図】

[参考文献]

-Dante Alighieri, *La Divina Commedia, Inferno*, Commento di Anna Maria Chiavacci Leonardi, Oscar

Mondadori, 2007.

-Miguel Asín Palacios, *Dante e l'Islam, L'escatologia islamica nella Divina Commedia*, Traduzione di Roberto Rossi Testa e Younis Tawfik, EST, 1997.

-Maria Corti, "La <<favola>> di Ulisse: invenzione dantesca?" e "La *Commedia* di Dante e l'oltretomba islamico" in *Scritti su Cavalcanti e Dante, La felicità mentale Percorsi dell'invenzione e altri seggi*, Einaudi, 2003.

-Umberto Eco, *La bustina di Minerva, Dante e l'Islam*, *l'Espresso*, n.50 anno LX, 18 dicembre 2014.

-楠村雅子「ダンテとイスラム文学との接点」『イタリア学会誌』25号、1977年

(元当館スタッフ)

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

2015年4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校: 日本イタリア会館

3/31(火)11:00～12:30 4/4(土)11:00～12:30

● 四条烏丸: ウイングス京都

3/30(月)19:00～20:30

● 梅田: 大阪駅前第4ビル

3/30(月)19:00～20:30 4/2(木)11:00～12:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校: 日本イタリア会館

4/4(土)11:00～12:30

ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校: 日本イタリア会館

4/8(水)14:00～15:30

イタリア発月刊日本語新聞

COMeVA?
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

ローマと美術③

『ローマで双子出産』

浅田 朋子

イタリア人の夫との結婚生活2年目の昨年はじめに、双子を妊娠した。まさか双子だとはまったく考えもしていなかったのに、産婦人科の検診で「双子ですね」と言われたときは信じられなかった。

38歳、多胎妊娠、初産、外国…。妊娠は望んでいたものでうれしかったが、これからのことを考えると不安のほうが強かった。

イタリアでは、出産費用は保険適用の検査・出産であれば無料である。「なんといい国ではないか！」と思われるかもしれないが、この「無料」がくせものなのである。

もともと何をするのも時間のかかる国で、無料で診察を受ける手続きにうんざりする。いちいち、かかりつけ医の診断書、処方箋をだしてもらい、公立病院の各科に受診しに行かなければならない。そして公立病院は常に混雑していて、予約もいっぱいだ。この行程が嫌なのであれば、私立病院やクリニックに行き、実費で払えばいいのであるが、これがまたべらぼうに高い。

多胎で高齢というリスクな妊娠ということと、公立病院では医師は選べず毎回どの医師になるかわからないのが嫌だったので、実費でプライベートの産婦人科医にかかることにした。一回の診察料は200ユーロほどである。そこで診察、エコーを受け診断書・処方箋をかいってもらうが、公立の医師ではないのでこの診断書では保険はきかない。なので、かかりつけ医のところに行き、産婦人科医の診断書に従い、保険適応の必要検査項目等が記載された診断書や処方箋を発行してもらうのである。かかりつけ医での診察・処置は全て無料である。これをもって公立病院に行き各検査を受ける。妊娠中の検査は保険適応で無料のものが多い。しかし私の産婦人科医の出す検査項目は保険適応外のものが多かったのに、毎回

かなりの額を払っていた。そして後日、検査結果を病院に受け取りに行き、産婦人科医の診察を受けに行く。産婦人科も検査機関もある私立のクリニックにすればこんな手間もないのだが、そんなことをするとまたさらにとんでもない費用がかかる。なので私はこのプライベートの産婦人科医とかかりつけ医、そして公立病院の往復をイライラしながら繰り返していた。

私のかかった産婦人科医はプライベートドクターで、義父の友人である心臓外科医の紹介である。「信頼できる腕のいい医者」と聞いており、勝手に温厚で物腰の柔らかい初老の男性医師を想像していた。実際は、ちゃらっとした、何だか軽い雰囲気のある医者であった。若く見えるが50歳くらいだろうと思う。どういえばいいのかわからないが、女たらしが医師になっちゃった、みたいな感じなのである。しかし最終的には、上手く出産をコントロールしてくれた優秀な医者だった。

日本での産婦人科は、女性のデリケートな精神面を考え、気の配った対応をしてくれる。例えば内診は直接顔が見えないように医師とのあいだにカーテンがひかれる。脱衣場所もきちんとしている。

イタリアのプライベートドクターはたいてい普通のアパートの一室を改装して診察所になっている。なので私の医者の診察室も机と書類棚、診察台とエコーがポンと置かれているだけである。もちろんアシスタントの看護師なんていない。

緊張の診察初日。「ま、話の前にとりあえずエコーしよっか。」軽いノリで言われ、夫とともに診察台に促された。産婦人科の検診は必ず夫に付き添ってもらった。他の病院やクリニックでの診察に夫が来られないときは、義両親が付き添ってくれた。私の場合、幸運にも夫は自営業で、退職している義両親の協力も大いにあったのでこんなことができるが、他者の協力を得られずひとりがんばり、外国で出産された方はどんなに大変で不安であつたらうと、本当に頭が下がる思いである。

さて、エコー。診察台の前で「じゃ、脱いでー」といわれた。どこで？どこでか？医者との見守る中、パンツを脱ぎ下半身丸出しである。そしてさっと内診が始まり、私が大股開きで診察台の上に

いる間、夫と医者とは世間話なんかするのだ。なんかこの状況おかしいやろ？とか思わないのかな、イタリア人は。

こちらで日本のようなデリケートなサービスや気遣いを期待してはいけない。



【出産したローマの産院】

あるとき、胎児検査のエコー(別のクリニックに受けに行った)の結果に気になる箇所があり、次の産婦人科医の検診まで待たずに早く受診しに行った方がいいかどうかEメールに検査結果を添付して打診した。すぐに返信が返ってきた。「イタリアでも、さすがに医者はずっとしてわ！」期待に応じてくれてうれしくなり、急いでメールをあげた。

「Va bene! Ci vediamo lunedì!!!」

これだけ。なんやこれ。Sigraもなんもない。「！マーク」なんかいらんで。きちんとした形式で書いたメールの返事がこれか。友達にランチの待ち合わせ聞いたんじゃないんやで！

しかも、検査結果の質問に何も答えてない。軽いめまいを感じて、夫に「これ、この返事、なによ？」と聞いてみた。「え？いいっていつてんだから、検査は問題なかったんでしょ。もとの予約日の月曜日に診察しましょうって言うてるし」そうじゃなくて、こちらとしてはもうちょっと具体的に、問題がないという説明がほしいのに、誰もわかってくれない。

出産にむけての段取りを聞いてもあいまいにしか答えてくれない。「35週で帝王切開で出産。経過がよければ38週で」ということしか言わない。多胎妊娠は単胎妊娠と違い、早産の危険や妊娠高血圧・糖尿症等になる率が高く、十分な健康管

理が必要であるのに、なんの注意事項もいわない。ああ、でも「お菓子は週に一度だけ」とは言われた。それだけ。日本では早産傾向にある人はもちろん、またはそうでなくても健康状態を常にコントロールするため、自然分娩・帝王切開にかかわらず28週頃から出産まで病院に管理入院する人が多い。イタリアではどうなのか、管理入院のことを医者に聞いてみた。

「は？入院してなにすんの」いや、なんにもしなくていいように入院するんですよ。まあ、こういう転ばぬ先の杖、みたいな考え方がないのはわかってたが。

私の場合のようにプライベートで産婦人科医にかかる場合、その医者との提携する公立の病院もしくはクリニックで出産だけおこなう。私は帝王切開で出産なので、手術予定日に病院を予約して医者がそこに出向くのである。出産日も近づき、予約等の段取りを聞いてみた。「あ、僕が予約していたから大丈夫。えーっと10月7日って言うたっけ？」おいおい、出産日あいまいなのか？かなり不安になった。

出産の段取りについては出産する病院の指示に従う。私は入院がいつからか、何が必要か等、病院の助産師に聞いてみた。

「えーっと、あなた帝王切開よね。じゃあ、当日の朝7時きて。手術は、まあ、11時くらいからかなあ？」はあ？当日！？前日とかでもなく、当日の朝って。「入院は何日なんですか？」「帝王切開はね、3日間よ」手術日込みの3日…。開腹手術で、3日で生まれたての赤子を抱え退院で。無料で出産だけに、3日でさっさと追い出すのである。

出産前日、1週間前に「もう出産まで診察こなくていいけどね」と言われたが「診察してください！」と頼みこみ、最後の診察をうけた。内診もなにもなく問診のみ。「じゃあ、あした病院で会おう！」とデートの約束みたいにさらりと言われた。「先生、時間通りちゃんと来るんやろか」と夫に言うとうと「まあ、明日中に手術できたらいいんじゃない？」といわれた。そうね、この国で時間とおりにありえないし、予定なんてあつてないようなもんだしね。

当日、心配をよそにちゃんと時間通りに医者は来た(あたりまえか)。看護婦たちに愛想を振りまき、コートをひらりとさせながら「チャオ！元気？」

～大阪～

イタリアンレストラン紹介

ガーデンハウス セントメリー

オーガニックにこだわり、食材の持つ風味・味を最大限に引き出したナチュラルレストラン。常に旬の食材を使った季節のおいしさをお楽しみください。

特典(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)
:1ドリンクサービス (期間:3月末まで)

住所:大阪府高石市西取石 6-2-5

電話:072-265-1231(レストラン直通)

072-265-1188(ウェディングサロン)

HP: <http://www.st-mary-4d.jp>



と挨拶された。「まあまあです」とイタリア語初級の例文のような会話をして愛想笑い。まだ私服のままであることは見なかったことにした。本当に今日が出産日なのかな…。あまりに緊張感のないまわりの雰囲気自分に自分が妊婦であることすら忘れそうになる。「じゃあー、手術室で待ってるから」とウインクして去っていった。うん、私もすぐ行く！青春映画みたいだな…。

手術室では私一人が異常に緊張していた。怖かった下半身麻酔もあっけなく済み、「はじめます」の一言もなく、医者とアシスタントが世間話するなか手術は始まり、双子はあっさり産まれた。そして助産師が私の側に赤ちゃんをつれてきて、「ほら、キスして！」と生まれたてでべちゃべちゃの赤ちゃんを私の顔に押し付けてくる。強制なの、キスは？「ほら、キス！！赤ちゃん、ママって！はやく！！次の子もう産まれたよ！」見ると助産師の後ろに、もう一人の我が子を抱えた助産師が待っていた。「キスして！はやく！」むりやりキスさせられ、緊張と疲労でもうろうとするなか帝王切開手術は終わった。

そしてきっちり3日後、まだまだ死ぬほど傷が痛くて、起き上がることもままならないのに「元気でね！！」と笑顔で病院を追い出された。双子は低体重で産まれたので、念のため5日(それでも5日)ほど病院にいることになった。2200g と2400g。日本なら2週間は病院で管理するだろう。しかし3日後の朝、突然病院から電話がかかってきて「今日連れて帰って！もう大丈夫だし、双子元気だし！それに新生児室はいっぱいな！」と言われ、慌てて病院に迎えに行った。母子共々3日で追い出され、私の妊娠・出産の日々は終わった。

医者や病院の雑な対応や説明のなさ、適当な雰囲気不安にはさせられたが、明るくポジティブなので、ネガティブ思考で恐がりな私にはちょうどよかったのかもしれない。

いろんな出来事があり検査結果で不安になったりもしたが、双子は4ヶ月の今まで何事もなくすくすくと育っている。そして今、しみじみと、イタリアでの出産は、終わりよければ全て良しなんだなあ、と感じている。

(元当館受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>